

最 終 講 義



わたしの選んだ道＜文学研究＞  
Meine Wahl „Literaturwissenschaft“

城 眞 一  
Shin'ichi JO

東京医科大学ドイツ語教室  
Department of German, Tokyo Medical University

皆さんには、本日は、枉げてここにご参集いただき、ありがとうございます。また瀬尾先生からは身に余るご紹介をいただきました。まことにありがとうございました。

さて本日はいよいよ最終講義と相成りました。演題には「わたしの選んだ道＜文学研究＞」と掲げましたが、何を語ってもわたしの場合はそれを語ることにになりますので、題にはこだわらず、これまでの教育と研究を顧みることによって、皆さんの何かのお役に立てればと思います。

わたしが東京医大の新宿キャンパスに初めて参りましたのは1979年の4月でした。当時のドイツ語教室主任教授金子正昭先生が、わたしの恩師慶応大学の塚越敏教授と懇意で、恩師の推挽によって私は東京医大との縁を与えられました。2年後の1981年、昭和56年からは専任講師となり、その後助教授、教授と昇任させていただき、今日に至ります。大学院生の時から数えて40年余りを基本的にはドイツ文学研究に費やしましたが、東京医大に来てからは、教育活動が大きな比重を占め、一時期は7割以上の時間を教育活動に費やしました。しかし時代も移り、ドイツ語の需要が減ったため、この10年間はかなりの比率で、研究に時間を割くことができるようになり、かえって幸せであったと感じています。また、その間の教育研究活動の場所は、20代では慶応大

学とドイツのマールバハ文学資料館でしたが、ここへ来てからは、研究会や学会で東京を離れる以外は、ほとんどを東京医大ドイツ語教室を中心に活動しました。

教育面では、当初は初級のドイツ語と中級の講読を担当し、ドイツ語をとおして、文学や言語学等の話題を幅広く提供し、少しは学生の知的好奇心に添えてきたつもりです。実際、今から思えば、1980年代には、カフカやヤスパース、フロイトなどに興味をいだく学生が多く、難解な小説や論文を読ませても、自宅まで質問に来る学生もなかにはいて、教え甲斐がありました。(病跡学の分野に進み、トラークル研究で論文を書いた教え子もいました。)東京医大の草創期にはこのような型にはまらない師弟関係がさぞかし多かったことでしょう。教師がサラリーマンになったら真の教育はできるはずがないと思い、成績を目当てに陳情に来る学生以外には、自宅の門はたえず開いておきました。

やがて1990年代になると文科省の大学設置基準のいわゆる大綱化が実施され、大学はカリキュラムをかなり自由に設計できるようになりました。このとき、教養科目をいかに扱うかという議論が日本各地の大学で流行し、本学もその中に巻き込まれ、私自身もその議論の渦中であって多くの発言を求められました。本学の方針を決定されたのは、当時の伊

\*本論文は平成27年1月16日に行われた最終講義の要旨である。  
(別冊請求先: s-jo@tokyo-med.ac.jp)

藤久雄学長でした。同学長の決断はすばやく、「医師には、医師ではない方々以上の教養が必須である」という明確な方向を打ち出されました。東京医大の一般教育改革はこの言葉とともに始まったと言えます。ただし、医師にとって必要な教養とはなにかという点をそれ以後、われわれは追求しなければならず、その作業はいまなお続いています。わたし自身は、医師の教養は、他の人々の教養と別段変わったものではなく、「この限りある地上の生において、ほんとうにかけがえのないものを見極める目と、それを大切に作る気持ち」、これさえあれば、すべての教養は自ずと身に付くのではないかと思っています。もとは「お役所」が言い出した大学改革は、思わぬ学問論へと発展しましたが、今となっては、それはそれなりに意義があったと思われます。またこの頃 1990 年代初頭から当大学の一般教育のカリキュラムが大幅に変わりました。横断的テーマを扱う人間学のゼミや、特論型の少人数ゼミが多数用意され、学生はその多様性を楽しんだことと思います。しかし、やがては教員側の発想が枯渇し、ネタ切れでマンネリ化して、いわゆる教養ゼミは衰微してゆきました。伊藤学長の理想は簡単には実現できないことを知りました。

そして世紀が変わってやがて PBL の時代が東京医大にも訪れました。この方法をいち早く取り入れたのは先の教養主任の荒井貞夫教授でした。この先進的な方法を医学部の教養教育に取り入れることの必然性を、同氏はほとんど直観的に把握されていたと思われます。わたしもまた遅ればせながらこの方法の優れた点に大いに賛同しました。つまり簡単に言えば、それは、作為されていない現実の断片（それはテキストであったり事物なのですが）の中から統合的な知の体系を学んでいく、あるいは構築してゆく、という方法です。ところで、こうした個別者の中に普遍者を見出してゆくという方法は、個別的な物や人に普遍的なものを読み込み、それらを永遠化する文学や造形芸術の方法に近似し、広くは古来からの哲学の方法とも言えるでしょう。学問の道への第一歩を記した大学生に与える最も基礎的で、正統的な方法であると考えられます。この PBL 教育を、在任中の最後の 10 年余りにわたって実践できたことは、貴重な体験でありました。課題シートを与えられ、模索を始める若い学生の思考の流れを観察するとき、まことに学問とは、個別の中に普遍を

読み込み、普遍の中に個別を想起すること、この二方向の往還運動に尽きる、という実感を持ちました。もっとも、独善的先入見に染まった学生にはこの純粹な知的営みはまったく看取できませんでしたが。ここでご提案ですが、学生の思考力が透けて見える PBL の方法を、何らかの形で入試に取り入れればいかがでしょうか。ご一考をお願いいたします。なぜなら、この方法は、断片的知識や個別のスキルを重視して大局を見ない受験生を、つまりは学問とは無縁の試験の亡者を間違いなく排除する最良の方法だからです。

以上、もっぱらドイツ語だけで始まった教育活動は、時代にもまれ、多様化し、その都度模索を重ねましたが、ついにはもっとも妥当な教養教育の着地点、PBL を見出したと総括したく思います。

研究面ですが、専門が文学研究という目立たない、決して脚光を浴びることのない領域です。詩人や作家には著名人が多いのですが、それらを研究する人で有名な人と言えば国際的にもわずかです。たとえば、ドナルド・キーンさんですが、この方も日本では著名ですが、ドイツやフランスではそれほどではありません。つまり国際的な普遍性のない学問以前の、ただのナショナリズムの産物に成り下がりやすい領域です。いくら業績を挙げても絶対にノーベル賞のない、最初から空くじのような分野なのですが、この文学研究の成果によってわたしがいま生きていることもまた事実です。それは物質的な意味ではなく魂の問題としてそうなのです。

以前にどこかで申しましたが、わたしもまた少年のころ、将来は建築家や基礎医学の研究家となることを夢見ていたものですが（ちなみに山中伸弥さんと同じ高校を卒業しています）、医学部や建築科に入る前に私の身に起こった、ある種の体験を理解し、整理して納得するために、どうしても必要に駆られて文学研究に進まざるを得なくなったのでした。忘れもしない 17 歳の晩秋のある日の夕方、わたしは、不意に一連の言葉に襲われるように、まるで何者かによって私の口と手が使われるかのように、つぶやきながら書き始めました。それはわたしの未来を予見するような一つの構想でありました。どこからそんな言葉が湧いてきたのか、一晩中書き続け、明け方にはくたびれて眠り込み、目が覚めれば数十枚の原稿が眼前にありました。わたしは何者かによって

使い尽くされた手袋のようにただ放り出されていました。このとき以来、わが身に起こったこの一種の、「トランス状態」と言ってよい体験を、どうしても理解しなくなったのです。昔であればお坊さんにでもなっていたのでしょう、わたしは、建築家や科学者になりたいという純粋な夢をいったん保留して、精神の正常さを保つために、すべてに優先して自らの魂と言葉について研究せざるを得なくなったのでした。わたしがわたしを失うことなく生き残るためには選択の余地はありませんでした。そのさい真っ先に会ったのが、ライナー・マリア・リルケというドイツ語で書いた詩人の作品でした。この詩人もまた、何者かの声に襲われるようにして書き始め、一晩で数十篇の詩を完成するタイプの詩人でした。わたしは憑かれたようにドイツ語を学び始めました。

わたしは 20 代に 2 篇の論文を書いたのですが、そこで初期リルケの宗教と言語の問題を扱いました。しかしこれは実はリルケのなかに私自身を読み込む、つまり、リルケ研究を口実に、自己分析を試みる内容でした。しかし詩人を文字通りわがことのように論じたからか、これらの論文は意外と評判がよく、やがては日本独文学会の外郭団体から賞を受け、そのことが機縁で確か東京医大にも縁をいただいたと記憶しております。ただし、初期リルケの研究によって、わが身に起こった神秘的な言語体験の謎はある程度、解明されていたので、わたしはもはや文学研究を続ける主たる動機を失っていたことも事実です。

しかしちょうどそのころ、日本語版のリルケ全集編纂という巨大な企画に誘われ、光栄なことに若輩のわたしにリルケの日記の註解と翻訳という仕事が回ってきました。かつては哲学者の森有正氏と小説家の辻邦夫氏がバリ留学時代に抱きしめるように愛読したという、リルケの若いころ書いた『フィレンツェ日記』（1898 年）は、やはり魅力的でした。詩人リルケの誕生を告げると評されて久しいこの日記にはしかし、なぜか半世紀以上も定本はなく、日記の本文を確定するテキストクリティークから始めました。この註解の仕事に没頭するうちに、わたしはすっかり文学研究の道に引き込まれてしまったのです。イタリアの初期ルネサンス芸術や地中海世界の古代芸術に魅せられながら、この日記に註釈を付け、翻訳し終わった時には、もう 40 を越えていました。

当時、この『フィレンツェ日記』は文学史上で評価が定まっていたとは必ずしも言えないにもかかわらず、不思議と研究対象からは外されていました。おそらくは、日記の中でこの詩人があまりに唐突に「神」、「芸術家」、「宗教」、「芸術」といった用語を特殊な意味で使い始めるために、どの研究者も戸惑い、最悪の場合はこの日記はただの「若気の至り」にすぎないと思いこみ、研究対象から外していたのかもしれませんが。しかし事実はそうではありませんでした。当時のリルケの読書範囲を絞っていけば、日記の断片のほとんどが、生涯の恋人ルー・アンドレアス・ザロメの著作への、精確な返答となっていることが判明してきました。マールバッハの研究所でルー・アンドレアス・ザロメの散逸していた論文や書評を館内からかき集め、机上に積み上げたうえで、リルケのテキストに突き合せたとき、リルケの日記中の発言の謎が次々ほぐれてゆきました。少し大袈裟ですが、ひとつの詩精神を誕生させた秘められた壮大な対話を発見したわたしの喜びは、譬えようありませんでした。驚きはそれにとどまらず、ルー・アンドレアス・ザロメによってニーチェ解釈のさいに適用された宗教心理学の方法が、リルケの日記中ではちゃっかり借用されて、ルネサンスの芸術家に適用されていること、さらにはニーチェの賛美した米国の神学者 R.W. エマソンの神観念が日記中のリルケの「神」に拭いがたい痕跡を残していることなどが分かってきました。これらの発見をすべて『フィレンツェ日記』註解に盛り込みました。少し自慢させてください。この注釈は日本語で書かれたにもかかわらず、（日本語を解する編集員を擁する）ドイツの学術誌 *Arbitrium* において、ドイツ語で書評され、魅力的な仕事と褒められました。日本語で書いても機会に恵まれれば国際的な評価を得ることができることには驚きました。難解な『フィレンツェ日記』が思想史上においてはじめて登録され、それに対してお褒めの言葉を受けたのですから、わたしは素直に喜びました。それが機縁で、この雑誌の定期購読者となりましたが、さすがに二匹目のドジョウはおりませんでした。

そしてここからが大変でした。例のカリキュラム論争に巻き込まれたこともありましたが、文学研究を続行する内面的な動機が、つまり研究への情熱が悲しいことに消え失せてゆくことを感じ取ったからです。わたしは今まで、自らに問うてどうしても書



かざるを得ないがゆえに書き、研究してきました。決して業績のために書くということはありませんでした、そうなれば恥だとすら思っていました。文学の場合、書くことの内面の動機が失われた時、それは文学者の死を意味すると思います。そのことは文学の創作であっても研究であっても変わりはありません。したがって書けなくなること以上の恐怖はありませんでした。

そしてこのときわたしに新たな研究への動機を与えてくれたのは、一人の優秀なカフカ研究者でした。その後のわたしの一連の科研費による研究「プラハとダブリン」の比較文学的研究の構想の一切は、この研究者との対話から発生したことをここに告白しておきたいです。この方は、仮にKさんと呼びますが、わたしにとっては、長いあいだ心のどこかで出会うことを待ち望んでいた、かけがえのない友人です。Kさんは、わたしの窮状を見て、素晴らしい企画を提案してくれました。プラハとダブリン生まれのカフカ、リルケ、イエイツ、ジョイス、ベケット等はみな言語体験の特異性が創作の大きな動機となっている。またかれらは同時に20世紀文学の、したがって20世紀に生きる人間の言語の有り様を先駆的に決定づけている。この詩人たちに共通する苦悩や問題点を掘り起こせば、それは同時に現在あるいは近未来の東京やベルリン、パリやニューヨークといった異文化の錯綜する都市に生きる人々の、今後体験するであろう言語問題、宗教問題、政治問題などを先取りし、あらかじめ警告を発することができるのではないか、—このような趣旨のものでありました。わたしはまったく個人的な理由から文学研究の道を選び、挙句の果ては行き詰っていたのですが、この提案は野心的で、少し誇大妄想的ではありましたが、抗いがたく魅力的でした。私は一晩で、この構想のとりこになりました。

そこからは、研究者を募り、企画を立ち上げ、科研費を獲得するまでにさして時間はかかりませんでした。しかし、問題は、基盤(A)という莫大な予算が付き、国際的なシンポジウムを企画し始めたときに起こりました。わたしたちは、複数の言語を常に扱いますが、代表者のKさんはこの昔ながらのバベルの塔の呪いのようなものを、責任者として一身に受け、その重圧については屈してしまったと思われる。今から思えばその兆候は見ていたのに、彼がおそらくは鬱で自殺するまで、わたしはそのこ

とに気づきませんでした。何とも痛ましく、まるで、研究対象のカフカの霊が、Kさんを連れ去ったかのようでした。カフカの『判決』という短編の結末どおりに、Kさんは欄干から身を翻し、死を選んだのです。わたしたちの研究対象、言語危機の文学は、ときに研究者にその危機が転移して危険なものだということを改めて思い知らされました。

対策会議が東京と大阪で開かれ、この科研プロジェクトの続行か、停止かをめぐって議論しました(当時は研究代表者の交代は認められていました)。結果は、全員一致で、研究代表にわたしを指名し、企画は継続するという内容でした。この時ほど慌てたことは、それ以前の私の生涯においてありませんでしたし、その後もありません。(事実といささか異なりますが)わたし以外に代表者の条件を満たしている者はいないこと、もとはと言えばこの企画は、Kさんとわたしの親密な対話の中から年月を経て熟成されてきたものである、というのが大多数の方のお考えのようでした。少し時間をいただき、東京医大の研究支援室に駆け込み、相談に乗っていただきました。当時事務室にいらっしゃった若手のOさんとHさんが、極めて肯定的に支援を約束してくださったことで、腹は決まりました。家族にも、この数年は旅行もできないこと、深夜にメールの授受があることなどの了解を取り付け、ようやくこの大役をお受けいたしました。2008年の1月のことでした。

そののち、企画終了後も懲りずに、一か年の充電期間を置いて、基盤(B)の「プラハとダブリン」第2期まで研究代表を務め、昨年の春に終わったときには、頭のとっぺんが薄くなっていることに気づきました。文学研究の分野では、けた外れの大きな企画を大過なく終了できた理由は、なによりも東京医大が研究機関として成熟してきたからであると思います。研究支援課のサポートがなければ、外国人の研究者や詩人も参加する10名規模の企画は絶対に不可能です。この場を借りて改めて東京医大に幾度も感謝いたしたいと思います。謝辞はむろんのこと優れた研究分担者と連携研究者、研究協力者にも捧げられねばなりません。大小さまざまなわたしたち自身の矛盾や軋轢はそのまま、プラハとダブリンの詩人たちのそれであった、といま思い当たります。よくぞ耐えて豊かな成果を残していただきました。ありがとうございました。

さて研究目標の達成度ですが、報告文書には、ほぼ達成と書きましたが、本当は、個人的にはきわめて不満足です。目標はある程度達成されたかもしれませんが、未知の部分が夥しく出てきて、これらを片付けなければ、収まりがつかないという状況です。支援室に訊いたところ、退職後も科研の予算は管理する、先例もある、ということでしたので、この秋には、今度は単独で、リルケとオカルティズム、または、初期ニーチェの言語批判論『道徳外の意味における真理と虚偽について』の研究を、申請してみ

たいと思います。

研究が佳境に入ってきたときに、東京医大を去ることは残念ですが、その反面、少し環境を変えて新たなものを考えることができるという利点もあります。

この世の荒波から私と私の家族を護り、私の思い通りの研究と教育をさせてくださった東京医科大学の皆様に対しまして、言葉では言い尽くせない感謝の意を捧げたく思います。ありがとうございました。